

第10回総合計画策定幹事会概要

日	時	平成21年3月10日(火) 午前9時～午前11時15分	
会	場	庁議室	
出	席	者	勇幹事長、筒井幹事、加藤幹事、平井幹事、山本勝彦幹事、進藤幹事 入江幹事、守岡幹事、浅見幹事、西村幹事、中村健治幹事、中村好明幹事 山本芳一幹事、苗村幹事

[議事]

1 基本構想(まちの構造)について

事務局から説明。

《意見等》

- ・書いてあるのは都市の構造ではなく、土地利用についてではないか。構造ということであれば、きちんと構造ということを示すべき。現在、都市政策部門で進めているのは“集約型都市構造”ということで中心市街地を大きな都市構造上の中心として位置づけている。草津駅、南草津駅を中心として、その中間部分を中心市街地として位置づけている。そしてここに都市機能を集約していこうと。周辺の集落については公共交通ネットワークによって中心市街地へのアクセスを容易にしていく。つまり、コンパクトシティの構造である。これを目指して現在進めておりますが、まったくその事に触れられていない。ただ単に土地利用の構想ということであればこれで良いのですが、都市の構造であるので、きちんと明記してもらう必要がある。

それとエコミュージアムというもののイメージが湧かないのですが、もうちょっと分かりやすく表現できないかと思います。

→平成32年の都市構造、こういう状態のまちというものを表現しなければならないが、なかなか難しい。

- ・中心市街地を庁内横断的に行っている。当然、来年度も引き続き進めていく。これを進めていく手法に当たっては“まちづくり交付金”を取り入れ進めていく。通常5年、最長10年あるのですがこれを活用して進める。交通公共ネットワークについては、来年度に相互連携計画を策定して3年間の補助を受け短期で行っていこうとしている。であるならば、総合計画に位置付けられていないと総合計画とは別に進めているということになってしまう。

都市構造ということであるのなら、集約的都市構造がどこにも出てこない。その所をきちんと書いていただきたい。

→どういう表現になるかは分かりませんが、整合を図る必要はあると考えます。考え方、ベースは一緒にしておかなければいけない。

→中心市街地について、まちなかにぎわい拠点の中で「計画的な都市基盤整備と併せた土地の高度利用を基本とし歴史的な環境や旧草津川廃川敷地の活用、市民交流の活発化につながる諸機能の配置・集積等を図ります。」という表現でいれている。

- ・人口分析のなかで、これから人口が減少していくことが記載されている。それに対する対応はどうするのか。それに対する話という受け方をしていかないと、今までの分析から、ここにどうつながっていくのかが分からないと読み取ってもらえないのではないか。

- ・将来的には人口減少社会、超高齢社会に向かう。ではそれに見合った都市構造にしていかなければいけないというのが普通の考え方ではないか。にもかかわらず、基本構想にこれが反映されていなければおかしい。

→コンパクトシティの考え方は色々な考え方が出ており、必ずしも1箇所に機能を集積させる必要があるのか。考え方によっては市域全体にかかるものについては当然集約が必要であると、一方、徒歩圏内で日常生活が送れる。これが本来のまちづくりであり、これからの進むべき方向ではないか。

例えば山田学区の方は山田学区のなかで日常生活が送れる。ちょっと大きな買い物をしたりする場合は、中心市街地に行ったり郊外のショッピングセンターに行く。このような考え方をさせている方もおられる。これはコンパクトシティの考え方になるのではないか。

→今の話は中心市街地のことを話されていると思うが、それぞれが住んでいる場所で生活が送れる。何か必要が生じた時には中心市街地に行けるネットワークがあると。

- ・エリアの名称で、「共創のエリア」「共生のエリア」の意味がわからない。行政用語で使われていることは理解するが、一般市民向けの言葉としてどうかと思う。
- ・共生のエリアは緑とか農業系、くらしのエリアは住居系、にぎわいのエリアは商業系、創造のエリアが工業系ということだが、南草津駅の横の住居系をもっと延長して欲しい。

→共創のエリアについては笠山などの住工混在地がありまして、ここを工業系と色塗りしますと、混在地の問題をどうするのかという議論が出てきます。大変難しい問題ですが、何かをしていかないといけない。このような意味から共創という言葉を使っている。

- ・三ツ池にかかる件ですが、草津駅と南草津駅との中間点にまちなかにぎわい拠点となっているが、今後どうしていくのかスタンスを示していかなければいけないと考えているが、この位置づけはにぎわいでよいのか。財政運営計画上では4つの要素で計画されているようである。どちらかという与交流のイメージがあるが。ここで議論すべきか別のところで議論すべきなのかは分かりませんが。

→草津駅と南草津駅が拠点であると、真ん中の部分は今後、三ツ池を整備して新しい機能を集積していく、交流を中心とした拠点という位置づけである。交流というものを拠点とするかエリアにするかという議論もありますし、エリアとすると「くらしのエリア」「にぎわいのエリア」とは違うエリアの設定が必要となってくる。

スポーツと文化という所を別出しすると、ここだけ表現を変えることができる。そうしない限り文化もレクリエーションも、どちらかという、三ツ池はスポーツであるが、現案ではにぎわいのエリアに含めているので、入れてしまうとこうせざるを得ない。文化、スポーツを別出しすると草津で一番大きな箇所は、野村運動公園、総合体育館を位置付けないといけない、別立てすると書かなければいけない。

- ・基本的に草津駅と南草津駅を核としてその間を複合核とし、中心市街地を活性化させるために平成22年度の採択を目途にまちづくり交付金を活用していく計画をしている。この3つの拠点は必要である。
- ・にぎわいのエリアは草津駅と南草津駅周辺としている。まちなかにぎわい拠点はこれらを含んである。真ん中の複合核は、にぎわいのエリアではないのになぜ、まちなかにぎわい拠点となっているのか。

→平成32年に向けて草津市のまちづくりを進めていくなかで、大きなプロジェクトは三ツ池構想だけではないか。リニューアルという意味なら個々に存在するが。そういう意味でも総合計画の中でしっかり位置づけておく必要があると考える。確かに、にぎわいという少し意味合いが違うかなと思う。

- ・湖岸共生拠点があるが、烏丸半島を拠点としていることから言えば、例えば交流拠点みたいなもので位置づけてみるのはどうか。大江霊仙寺線を生かしながら、市民の交流の場とするような感じで適切に表せればと思うが。
- 交流研究拠点を三ツ池に入れてもよいかもしれない。交流拠点が2つになってくるが。
- ・第4次総合計画の都市構造を見てみると、田園・湖岸・リゾートゾーン、中心市街地ゾーン、丘陵部・交流研究ゾーンの3つに分かれている。シンプルで分かりやすいと感じるが、なぜ解体して細かくエリア分けする必要があるのか。もう10年間はこのゾーン分けで行けばよいのではないか。草津市の特性としてはこの3つで良いのではないかと考える。
- 成熟型社会であるため、今後それほど土地利用に変化はないと見込んでいることと、市民に分かりやすい観点から概念図のようなものより出来るだけ分かりやすく表現する方が良いと考えた。
- 国土利用計画を来年度に策定を予定している。同計画ではある程度の土地利用の方向を示していかなければならない。そういうことを一体的に考え、7つのエリア分けを行ったものである。基本的には都市計画マスタープランに合わせました。しかし3つのゾーンだけでは分かりにくいのももう少し詳しくしたものです。
- 今までの経過を見て大きく変化していない。そのような状況から見れば、現在の総合計画のように3つのゾーン分けで良いのではないかということになりますが。中心市街地の部分については都市計画マスタープランより丁寧に表示しなければならぬという思いがあります。
- ・細かい方が市民の方にわかりやすいと考えるが、三ツ池だけは違和感がある。自分の住んでいる場所が将来どうなるのか、具体的にわかりますので。
- ・そういう議論、各論は都市計画マスタープランの中で議論する余地を残しておかないと、総合計画である程度決めてしまうと、動きにくくなる。
- ・市民の方が「共創」と「共生」が理解できるのか。「草津エコミュージアムベルト」これは何なのか。共生エリアとは何もしないエリアということではないのか。
- もともとは「橋道構想」というものがあつた。共生エリアも基本調整区域である。
- ・エコミュージアムとは何なのか。現総合計画にあるものだが、何もされていないものを載せる必要はない。
- ・道路についても「外環状道路」という表現がされているが、外という表現はやめて欲しい。外に住んでいる者が阻害されたイメージを持つ。
- エコミュージアムは概念が大まか過ぎて、しっかり説明しないといけないと思いますが、湖岸堤には諸施設が存在しますし、琵琶湖の自然を活用し、調和を図るようなミュージアムが存在するという概念です。
- ・まちなか環状道路は赤で囲んだ所であると、『JR 草津駅、JR 南草津駅周辺の「まちなかにぎわい拠点」を結んでめぐる環状道路です。』とあるが、結んでめぐるという表現はおかしくないか。
- ・組立で「主要な道路構造」をどうしようとしているのかよくわからない、「細かいのではないのか」ということで基本構想というレベルで位置づけしようするとおおまかなものになる。最初の1行から、かなり細かく表現されている。図についてもシビアに描いてあるので、困ることにならないか。個別の路線まで詳細に記載している、構想の中まで入れていくのか。
- ・ネットワークで「緑のみち」「水のみち」「歴史のみち」としているがネットワーク化してうるおいを与えているとしている。普通、それぐらいで留めておくのではないか。

- 細かくすれば、市民には分かりやすくなるが、行政側で困る部分もある。粗くすると分かりづら
いと言うところがある。
- 来年度には国土利用計画を策定していくので、構造図もより正確に表現していく必要がある。
- 表現をアバウトにするということは将来的に何か計画があるということになるが。
- ・来年度、国土利用計画と都市計画マスタープランの改訂が同時になるので、そこで整合性をもた
せればよいのではないのか。
 - ・製本は22年の5月になる。基本構想は9月に国土利用計画は来年3月に議決いただく予定をし
ておりますが、この半年の間に細かい調整がはかれるのかという所もある。大津市は審議会も2
班に分けられ、基本構想班と国土利用計画班により同時進行をされていた。都市計画マスター
プランは、総合計画や国土利用計画に則して策定しなければならないので、同時に策定できるのか
という所もある。
- 総合計画の基本構想であるので細かい所は都市計画マスタープランなど、各計画に委ねるような
形で、おおまかに表現したらどうかということである。後に国土利用計画を策定するのだし、今
から整合性を図って、市民にとって分かりやすい形で細か過ぎず、粗すぎずという形にしたいと
いうことである。
- ・総合計画は今後10年間の進めていく施策の根幹となるものであるから、状況がはっきりしてい
るところについては位置づけておかなければならない。
 - ・構想は基本的な方向性を示す指針であり、逆に中途半端に細かくするのめどうかというところも
ある。
 - ・来年度策定する都市計画マスタープランの策定にも対応できうる図としておく方がよいのではな
いか。
 - ・にぎわいのエリアについて、新浜のイオンや駒井沢の商業施設もエリア指定していくのであれば、
木川など他の部分もどうなるのかということもある。現在の状況から10年後を推測するのも
難しいところである。
- 既に関の計画が出ているものや、用途地域の変更が決まっているものならば、位置づけていけ
ば良いと考えるが。組織決定や市民の理解が得られていないものを位置づけることはできないし、
結論を出していかなければいけない。
- ・国土利用計画がはっきり計画が立っていれば反映していけば良いがまだ、立っていないのだから、
まず基本構想のなかで骨格はこうであるという事を位置づけていけば良く、今後まちをどう
していくのか、具体的なものは基本計画に入れていくことである。
 - ・構想であるから概念プラスアルファぐらいでよいと考えている。基本計画はそれを具体化する
ものを、実施計画はそれをいくらお金を投入し実行していくのかをこういう流れである。ただし、
基本計画にコストを入れている所もあるが。基本計画と実施計画はオーバーラップするところ
があるが、構想は指針である。ただ、バックボーンとしてこれら資料をもってこういう思いでこ
ういう絵を描いたということであればよいと考える。

以上